

雜 纂

室町時代における丹波地方

魚 澄 惣 五 郎

一

丹波といへば、わが歴史上では屢々政治的陰謀の策源地であつたことを考へしめる。先には足利尊氏の篠村八幡社頭における舉兵といひ、後には明智光秀の叛逆といひ、いづれも顯著な事柄である。この丹波が政治的にも軍事的にも最も重要性をもつてきたのは吉野時代以後であるが、勿論その以前においても京都朝廷の北方の山岳地帯として、野心を抱くものが姿をくまらずに都合のよい土地柄であるから、この地方に逃れたものも尠くないけれども、歴史的な檜舞臺としてこの地方の活躍はその

以後のことに屬する。それは京都の室町に幕府が開かれ、武家の政廳が開始されたといふことにも關聯する。即ち吉野時代以後になつて多くの記録に、「丹波路さして落行く」といふやうな言葉が夥しく史料上にあらはれてくるのもそのためであらう。足利尊氏の如きも三度丹波に没落し、義詮もまた丹波に落ちたことが太平記に見え、また明德記や赤松記に赤松氏殘黨の浪人共が丹波に集つて赤松氏の復興をはかつた記事が見える。蔭涼軒日録・大乘院寺社雜事記等にも應仁文明の亂の頃浮浪の徒が丹波に集つたことを記してゐる。京都から播磨を経て山陽道に出るにも、但馬を経て山陰道へ出るにも、また若狹

へ出るにも丹波路を經るのが都合がよい。梅松論に佐々木道譽が近江を從へる爲に丹波路から進んで若狭の小濱に出で、更に北方より近江國中に亂入して一國を討取つたことが記されてゐる。かくて丹波の形勢如何は中央の政治に重要な影響を與へることになるのであるが、これらの諸將の支柱となつて活躍したこの地方の土豪とは、そも／＼如何なる状態のものであつたかを些か考へて見たい。

丹波各郡にわたる史料を採訪して所々に殘る地方豪族の傳承や系圖等を見ると、或程度まではこれらに關する狀勢が明かにされるやうに思ふ。

丹波の土豪は多く鎌倉時代の中期以後關東の武士が此地方に土着して發展したもので、それが吉野時代五十七年の戰亂や明德亂或は應仁文明亂等に乗じて何れかに味方して、一族の運命の開拓をはかるべく活躍したらしい。これらの傳説の中には全然作爲されたものもあるであらうが、一概に捨てられないものもあつて、古文書や記録等によつて、その事情が明かにされるものがある。

今著しい土豪について述べると、丹波の赤井氏(葦田氏ともいふ)は寛政重修諸家譜によると鎌倉時代に丹波に流浪したものであり、足立氏は吾妻鑑に見える如く武藏足立郡の地頭で、足立延元の孫が丹波へ移住したことから起つたので、丹波佐治氏の如きもその一族である。また萩野氏はもと相模を本貫とし、久下氏は武藏大里郡の私市黨に屬し所謂武藏七黨の二で、承久亂後新補地頭として丹波に來たものであり、關東管領家の始祖上杉氏の如きも上杉家譜等によると鎌倉時代に上杉重房の時、丹波何鹿郡上杉庄に根據をつくり、後更に關東に移つたものである。

## 二

丹波の豪族としては記録・古文書の上では以上の久下・萩野・足立・佐治・赤井等の諸氏や波々・伯部・長澤等の名がよく見え、太平記によると笠置山の戰の時、幕府の軍に丹波の住人久下・長澤の一族八百餘騎が參加したことを記し、また後醍醐天皇が船上山より還幸後の京都での合

戰に佐治孫五郎といふ者が五尺三寸の太刀で敵を切りまくつたと記し、千種忠顯が奮戦した時には荻野彦六・足立三郎等が五百餘騎で官軍に屬して武功をたて、四條畷の戰の時にも荻野彦六は参加してゐる。また足利尊氏がはじめ丹波篠村八幡で兵を擧げた時、久下時重・波々伯部次郎左衛門尉等の一族が第一に参加しこれに味方してゐる。

その後明德記・應永記・嘉吉記・應仁記等の諸記録にもそれ／＼これら一族の名が見えるが、また古文書等の上からでもこの事を明かにすることが出来る。殊に久下氏の如きは現に丹波氷上郡にその子孫が存し久下文書として多くの史料を傳へその盛衰が明かにされ得る。元來久下氏は先に述べた如く武藏大里郡久下保から出たので久下・村岡・中澤・東條・熊谷・川原諸氏と同流であつた。久下重光が先に治承四年八月頼朝に従つて戦功があり、その孫直高は承久三年この久下郷の新補地頭に補せられた。その時その弟の直弘は美作に移住したが、その一族は主として丹波に發展してこの地方を開拓し、當

時京都の天龍寺や金剛院の寺領であつた丹波氷上郡栗作郷等の莊官となり、この地方にはびこつたのであつた。

この直高から五代目が彌三郎時重で、足利尊氏が京都の合戦に失敗して丹波に落ちのびた時にも久下氏の本據たる氷上郡玉巻に至り、久下氏に頼つてゐる。その後孫貞重は戦功によつて同郡河口莊・小椋莊をもちつたことが足利義詮の御教書に見える。この貞重の弟彈正忠頼直の時になつて正平十六年丹波守護代となり、河守郷・心樂莊等をも知行しその弟彌五郎重基は建武四年越前金崎城の戦に出陣してゐる。

また久下貞重の孫新三郎重之は文安年間に細川勝元に従つて軍忠をたて、重之の孫重國の時には河口・牧山・柏原・宮津・心樂・新屋・小椋・宮田・朝來(但馬)等を所領してゐた。これ等によつても足利時代を通じてこの一族が次第に發展していつた経路が窺はれる。しかし久下文書によると久下氏傳來の家寶である古文書等を、明應二年二月頃から京都の四條町酒屋中西修理進秀長なるもの、もとに預けてゐたが、七月六日に京都綾小路室町

から出火し、五條坊門堀川清水邊まで炎上した時、この酒屋の土藏が焼失してこの文書類が大方烏有に歸してしまつた事を記してゐる。恐らくこの頃久下氏の家運も漸く下り坂で、京都四條の富豪である酒屋中西秀長から土地を抵當に金錢の融通をうけたものと思はれる。尤もこの後と雖も久下氏は全く衰へたのではなくその餘勢があつたので、重國の子政光が細川政元からもらつた軍忠狀も今に存してゐる。久下氏の由緒書には明應六年の奥書あるものが存することから考へて、恐らく政光頃までは丹波の土豪として相當の勢力をもつてゐたものと思ふ。系圖によるとこの政光の子の頃からその領地が他のものに横領せられ、その子孫に玉卷五郎といふものがあつて慶長元和の大阪の役に出陣して討死してゐることが記されてゐる。恐らくこの時に久下氏は地方の百姓となつてしまつたのであらう。丹波一土豪の盛衰と政治的大勢の推移とを併せ考へて興味の存するところである。

## 三

また上杉氏について考へると今丹波何鹿郡八田村に字上杉といふ所がある。上杉家譜・上杉兩家及庶流傳等では上杉重房が宗尊親王に從つて鎌倉に下る時、この上杉庄を賜うたと傳へてゐるが、今この八田村に上杉彈正の邸趾と傳へる遺跡が存してゐる。足利尊氏・直義兄弟が日本六十六國二島に各々一寺一塔の所謂安國寺利生塔を發願した時、丹波の安國寺としてはこの何鹿郡にある古利光福寺をもつてこれに宛てた。この光福寺は恐らく上杉氏とは師壇の關係があつたと思はれるもので、上杉朝定が建武三年この寺に土地を寄せたのを始とし、その後度々土地を寄進してこの寺の大壇越となつてゐる。また足利尊氏・直義の母は上杉氏の出であるから足利氏の崇敬も篤く、尊氏兄弟の母上杉清子も夜久郷をこの寺に寄進し、尊氏の没後には特に尊氏の遺骨を納めたのみでなく、また尊氏の室赤橋氏の遺骨をもこの寺に納めてゐる。かくこの地方は上杉氏と關係が深いのみでなく、ひいては尊氏との因縁がこの頃既に結ばれてゐた。しかしこの寺も應安二年頃には丹波の土豪荻野氏の爲に一時その寺領

を横領されてしまつたらしい。上杉古文書によるとその後應永五年十一月には幕府は上杉憲定のために何鹿郡八田郷の内本郷を興へたこと等を記し、室町時代の中頃までは上杉氏の所領があつたことを示してゐる。

當時丹波地方に領地を有してゐた寺院・神社・權門等を舉げて見ると、東寺領としては有名な大山莊、祇園社領としては波々伯部庄があり、その他天龍寺・相國寺・神護寺、等持院等の寺々や、賀茂・松尾等の神社領があり近衛政家等の領地もあつた。丹波の土豪は多くこれ等の社寺權門と深い關係があつたのであるから、應仁亂以後土豪の勢力が發展すると共にこれ等の社寺權門の所領の多くを横領してしまつたこと、考へられる。

#### 四

京都から丹波への交通路は王朝時代以來京都の西桂から大枝坂を越えて南桑田郡篠村に入るのが普通の通路で大體大堰川の谷間を通過する。篠村から北は今の龜岡に出で川に沿うて船井郡に進むので、丹波國府や國分寺の

遺趾がこの通路に認められる。今一つの重要な交通路は播磨・丹波をつなぐもので、これは播磨の中央を南北に貫流する加古川の溪谷に沿うてゐる。加古川は丹波氷上郡に入つて久下村附近で二つに分れ、東方から流れてくるのが篠山川、西から流れるのが佐治川で今の佐治町を経て但馬へ通じてゐる。この合流點久下村が所謂久下氏の根據地にあつてゐるので、尊氏が正平六年直義黨の山名時氏や石塔頼房等に破られて丹波に走り、轉じて播磨の書寫山に逃げた時にも篠山川から久下村に出で播磨に赴いたのである。足利義詮も戰に破れた時仁木頼章等と共に二千餘騎を率ゐて氷上郡井原石龜寺へ落ちたことがあるが、この井原は久下村に接する所で當時の重要な交通路であつたことを示してゐる。この時萩野・波々伯部・久下・長澤等の一族もこれに馳せ加つたことが太平記に見える。更に他の一つの交通路は丹後由良川に沿うた路で山陰道と聯絡するもので、丹後から丹波へ出て福知山・綾部を經る通路である。綾部附近には先に述べた安國寺や禪宗の巨利天寧寺が今に存する。今一つの交通

路は今の神戸市の東方攝津武庫川の溪谷を上り篠山に通ずるもので、攝津武庫郡では所謂有馬口筋に當つてゐる。楠木正成が湊川の大會戰に當り、もし退却するとすればこの通路が可能であると論ぜられたことがあるけれども、元來丹波は足利氏の勢力圏に屬するのであるから、正成がこの方面に逃れることは不可能なことであつたであらう。

即ち以上の四線の通路が丹波と諸國を連絡するもので大堰川筋では荻野氏、加古川筋では久下・佐治・足立の諸氏、由良川筋では上杉氏・波々伯部氏の勢力圏であつたらしい。

室町時代における丹波の守護職ははじめ山名時氏で、更にその子氏清に傳へてゐるが、明德亂後明德三年に細川頼元がこれに代つた。山名も細川も室町幕府の要職たる三管領・四職中の巨頭であつたことから見ても、足利氏が丹波を重要視してゐたことが知られる。従つてまた丹波は山名・細川の二大勢力の衝突點ともなり、最も混亂を呈した所でもある。元來足利尊氏は擧兵の當時から

丹波の土豪を狩り集めてことを起したのであるが、その間に十分に部下諸族の統制がとれてゐない。たゞ多くは尊氏の爲に誘致され利を望んで應じたもの共に過ぎない。従つて室町幕府は始から武斷的統制が出来てゐないから室町時代を通じて戰亂に終始した。しかもそのため丹波は何時でもまぜ返されて土豪は隨所に横行し、これを味方として利用しようとするものが絶えず現はれ、遂には戰國時代になつて明智光秀をして丹波龜山城に叛逆を企てしめ、主君信長を弑するといふ大事件を起して政治的な大變動を與へる根據地ともなつた。しかし山國といふ地勢的關係からでもあらうが、この時代を通じて丹波からは信長や秀吉の如き偉大な人物も出なければまた堂々たる戰に終止したものも出なかつた。